令和 6 年能登半島地震における災害ボランティアセンター派遣活動報告会兼協働型災害ボランティアセンター運営研修における社協職員支援実践報告1(令和6年11月19日)

【活動報告者】

高崎市社会福祉協議会　吉井支所長　関口 純一　氏

派遣時期：令和 6 年 2 月 28 日～3 月 5 日　内灘町災害ボランティアセンター

令和 6 年 8 月 10 日～8 月 16 日　石川県輪島市災害助け合いセンター

高崎市社会福祉協議会吉井支所長の関口純一と申します。報告させていただきます。

まず、私の災害の現体験からお話しします。

平成 7 年 1 月 11 日、阪神大震災が発生しました。テレビを見ると、阪神高速道路の高架橋が倒れている風景が目に入りました。この時、私は大学生 3 年生で、宮城県仙台市に住んでおりました。そこで「災害」というものを目の当たりにしました。東北と関西は遠く離れています。テレビで、活動している大学生、同じような年齢の人たちが一生懸命活動している様子を見て、何もできない自分をすごく歯がゆく感じていました。それが、今に繋がっている部分があるかなと思っています。

また、(昨今は、地元の) 地域で災害の話をする機会も出てきたのですが、聴講した皆さんの中にも、体調や経済的な理由で、何かしたいけれど、なかなか何もできないなと、お話をいただくことが多くあり、似たような具合かなと感じてります。

ブロック派遣については、平成 23 年の東日本大震災で福島県南相馬市に行ってから何度か災害支援に行かせていただきました。高崎市社協の職員としては支援経験が一番多いです。最近は、若い職員も経験を積むようにということで、今年は私の他に 2 名の職員が、輪島市と穴水町の方に支援に入りました。

(地元では) 令和元年 10 月に、台風 19 号の水害で、高崎市災害ボランティアセンターを私が勤務する吉井支所で立ち上げた経験があります。

被災地への派遣前の思いという面では、やはり何度経験しても派遣で出かける前というのは緊張感がつきまといます。まず、派遣先に迷惑かけたくない、失敗したくないというのはもちろんと思います。短期間 (の支援) で失敗してしまうと、自分でリカバリーせずに、迷惑だけかけてきちゃうなと、不安がつきまといます。また、派遣先の地域を把握する難しさについても不安があります。災害ボランティアセンターごとに運営方針ややり方が違うのは当然なのですが、その部分で、経験をするほど不安になるというのもあります。派遣が決まってから被災地へ行くまでの間に、迷惑をかけぬように体調が崩せないというのも、自分が怖いと思うところです。怪我ができません。私はバイクが趣味ですが、以前、派遣の直前でバイクで転び怪我をして入院したので行けなくなった前科があります。そういうのも注意をしなければいけません。

あと、(群馬県内の社協の) 皆さんも、自身が所属する社協に、仕事を残して 1 週間留守

にするのは、すごく不安だろうと思います。私も同じです。1 週間居ないと、（日頃、仕事をしている地元で）何か起こらないか、その前に 1 週間分の仕事を片付けなくてはという部分の不安、というのもあると思います。

今回、2 月の内灘町支援のときにも、派遣初日に、地元（吉井町）から電話で、「所長、すいません、指定管理を受託しているセンターの風呂が壊れて使えなくなりました。」と連絡が入りました。到着後すぐでした。朝礼が終わってからすぐに高崎市役所に電話し、風呂が壊れたので中止にしますと、支援先から連絡した経験があります。

ただ、経験を重ねたことで、少しは冷静になれるようになりました。派遣前の日は眠れなくて、移動中の新幹線の中で寝ていたこともありましたが、最近は少し減ってきました。

ここから災害ボランティアセンターの活動報告に入ります。

私が 1 回目に入ったのは、金沢市のすぐ上の内灘町です。2 回目が輪島市となります。

内灘町災害ボランティアセンターには、2 月 28 日から 3 月 5 日に入りました。河北潟という干拓して埋め立てられた地域です。災害状況は、液状化の被害が大変多くありました。訪問した先で伺った話では、「揺れのときの直接の被害は無かったんだよ」と。「だけど、そのあと 1 時間ぐらいしたら、何か外でザーザー流れてる音がして、地面から、土混じりの水が噴き出していた」という話を聞きました。「そのあと家が傾いてきた」、なんていう話を伺う機会がありました。

発災から 2 ヶ月後の支援活動でしたが、上水道の方の復旧は早かったけれども、下水道の復旧が進まずで、仮設トイレが設置された地域が多数ありました。

訪問途中のお宅にはガレージに車がありましたが、訪問当初は形が残っていたのに、最終日には後ろの窓ガラスが割れていました。地盤の沈下が進行を目の当たりにしました。

活動として、現地調査を行いました。受けたニーズに対し、どうボランティアを派遣するか、資材は何が必要か等と下見しました。

1 日の訪問件数は、平均 3 件位です。多い日は 6 件位訪問しました。

以前の経験では、電話でニーズを受け付けるとき、「応急危険度判定は何色が貼ってありますか」と尋ね、黄色や青の場合には伺い、赤が貼ってあると分かれば、電話の時点で断る方法のボランティアセンターが多かったですが、今回は全て訪ねました。実際の活動では、赤判定のお宅はプロボノさんに、一般のボランティアさんはそれ以外にと振り分けました。

ボランティアセンターの運営方法ですが、ニーズ班、電話受け付けは、地元地域の民生委員さんが交代で当番制で電話を受け、場所やニーズの内容等を聞いてくださりました。

ボランティア対応窓口は、後に内灘支部に引き継がれましたが、県の防災士会の方が活動されていました。本部運営は、幹部派遣社協職員が行っていました。

現地調査は、ニーズを受け付けした民生委員さんと派遣職員が同行し、道案内を受け、地域の方々との「つなぎ」もしていただいたので、非常にやりやすかったです。

地元社協の方は、通常業務を運営され、その上、災害ボランティアセンターの運営状況の確認、報告を受け、また新たなアクションや資機材の準備、町行政との連絡調整折衝にとい

った業務も担っていました。通常業務で、介護支援専門員やケアマネジャーさんが受けてきたニーズとの繋がり、そのニーズへのアクションも、多くありました。

ニーズの内容は、家具、家財道具、仏壇等の運び出し、加えて、公費解体受け付けが始まったことで、従事期間の間にニーズが増加していました。他に倒壊ブロックの解体撤去、液状化による噴出物の撤去も出ておりました。

内灘町では、（資料の）この場所、赤で囲ったところが被害の多い地域でした。

ボランティアセンターですが、(資料にあるように)こういう形で屋内で行われました。

被災状況は、写真にあるとおりで、事前事後の状況を google map で見ることのできる従前の様子と比較してあります。

続いて２回目の派遣で伺った輪島市災害助け合いセンターの報告です。

伺ったのは、令和６年８月 10 日から８月 16 日お盆の時期でした。

震度が最も大かった地域の１つで、海岸線の延長が 80 キロを超える広い地域で、山間部が多くて、土砂崩れ、トンネルの崩落により、一時孤立した地域もありました。

令和４年度末で２万 3575 人だった人口が、この時期で２万 1449 人と、かなり急速なペースで流出しているそうです。

地域内には木造建物が多く、倒壊率が 30%超、朝市通りで地震１時間後に火災が発生してという状況でした。金沢市からのアクセスは非常に悪くなっていました。

我々が入ったときはかなり良くなってはいましたが、往来する上で中心になる道路は一本だったので、アクセスは良くありませんでした。

作業するボランティアさんは市外に宿泊し輪島市へ向かいました。石川県では、県が募集を集約し、県が集めたボランティアが金沢市を出発し、大型バスで輪島市を訪ねるという方式です。エリアが広いです。（資料にある）地図を見てください。

門前町にサテライトセンターが設置されていましたが、門前地区、輪島地区、町野地区とありますが、輪島地区に「輪島市災害助け合いセンター」の本部がありました。町野地区へ行くのに、非常にアクセスが悪くて、1 時間かかる状況だったので、この地区に向かうには、経験のある方が、１組ないし２組という形で、グループになって１日行ったきりでした。現地で昼食を採り、終了時刻まで活動して帰ってくる活動方法でした。

派遣期間の業務内容としては、11 日と 12 日、最初の２日間が、センターの運営、受け付け、マッチング、送迎、報告受付を担いました。13 日～15 日は、お盆シーズンなのでボランティアの受け入れを中止して休止。その間、現地調査の巡回を行いました。１日あたりの訪問件数は 5，６件。３グループで行いました。

災害助け合いセンターの運営本部では、社協の建物内でニーズ受け付け、現地調査、進捗整備、集計記録等を行いました。ＣＭＰ派遣職員によって運営を行っておりました。

ボランティア対応窓口は、特設のボランティア助け合いセンターが設置されています。受け付け、ニーズマッチング、送迎、報告はそちらで行っています。地元社協職員と派遣社協職員が運営しましたが、日中は派遣社協職員による運営でした。

派遣社協職員は、関西、中部、関東の各都道府県の市町村社協からの応援職員でした。

地元社協の方は、通常業務を運営し、通常業務に関わるニーズ、暮らしサポートセンター業務からの高齢者障害者の支援というニーズも多数上がっており、対応されていました。

ニーズの内容は1回目と同じ。家具や家財道具、仏壇等の運び出しでした。輪島地区ではどこお宅でも仏壇が立派で大きくて運び出しは苦労しました。ボランティアさんが多く活動していました。

派遣を終えてみて、我々が行ったのは、地元社協の皆さんの負担軽減のためだった、そう思っています。支援社協の存在が地元社協の皆さんの重荷にならないようにというのが、一番の目的、目標でありました。

現地調査というのは、幾つものを運ぶ、どれだけの荷物を片付けるかではなく、依頼者と家族の生活の思い等を、知ってくることだと考えていました。

また、被災地の皆さんの願いですとか現状というものを、今こういう状況だと、群馬、高崎に持ち帰り伝える。輪島の被災された方々の身方、能登への応援団を増やそう、そういう気持ちでおります。

正直、今まで支援に行った中で、活動や支援が上手にできたと、自分で満足して帰ってきたことは1回もありません。できるならまだ関わりたい、お手伝いした分は終わりまで見守りたいという気持ちもあります。

その部分で、冷静に考えて、群馬の高崎に居ながらも、できることをしなくてはと考えています。訪ねた地域ですから、輪島と内灘の方々の声をたくさん聞くことができ、いろんな形で応援し続けていきたい、そういう気持ちが強くなりました。

我々が、群馬でできることは、社協職員として、災害に強い社協づくりを、改めて考えるということです。災害ボランティアセンター運営計画の策定ですとか、今はＢＣＰも策定して運用していますが、こちらも随時見直して、自身が所属する社協の、ここが弱いなというところを知り、補完しなければならないなと考えるようになりました。

災害に強い地域づくりの面では、要支援避難者の把握と、支援策の検討、災害時に頼れる人・団体・組織の把握や繋がりということが必要と感じています。どんな方なら頼ることができるのか、どんな方々が一緒に支援に入ってくださるのかということを考えて、そこにネットワークを作っていかなければいけないなと考えております。

災害に対応する上で、群馬県内の社協同士の繋がり、いざというときに助けてと頼める関係・環境づくりが必要です。救援力に繋げていくことが必要です。頼まれた時にすぐＯＫの出る組織づくりもしていかないといけません。

本日、話すにあたり「群馬の皆さんに一言を」とお話をいただきました。

なかなか出かけられない、支援に行きづらい方もいらっしゃると思います。自分らの地元のためにも、被災者と被災地の実情を地元に伝えるですとか、経験を地元で活かして、地元地域の支援者との繋がりに活かしたり、災害ボランティアセンター運営方法を考える機会にしたり。自分自身の経験値を増やす上で、この支援派遣は良い機会、大切な機会になると

思います。社協にしかできない支援、社協職員だからこそできる支援を考える良い機会にもなるでしょう。

生意気ですが、災害を忘れないということが非常に大事かなと思います。忘れないことが、応援になって、忘れないことが、地元の防災に繋がるのかと考えております。

ご清聴ありがとうございました。